

スポーツと感動についての一考察

A study on suport and impression

1K06B213

指導教員 主査 宮内孝知先生

宮田 有里子

副査 杉山千鶴先生

【研究の動機・目的】

“スポーツが世界を明るくする”この仮説が本研究の根源にある。オリンピックやWBC、W杯やプレミアリーグなど、私たちに歓喜や熱狂を与えてくれるスポーツの影響は計り知れない。そのなかで最も大きな影響として私が捉えるのは、“人に感動を与えるツールとしての役割”である。そこで、先行研究にスポーツによる身体的な効果に関する研究はあるものの、感動がもたらす社会的効果を取り上げたものが少ないことから、スポーツの生む感動がもたらす社会的効果を明らかにすることが本研究の目的である。

【第1章 感動について】

感動についての先行研究から、感動と脳の関係と感動の種類と類型、感動喚起のメカニズムとその効果を明らかにした。その結果、感動とは肯定的な情動であり、主に喜びに伴ったものが多いことがわかった。「高関与状態」と「緊張→解放」が感動喚起に重要なプロセスであり、結果個人のモチベーションを向上させ、やる気、思考転換などを喚起させる「動機付け」効果などがあることを明らかにした。影響・変化は個人によって異なることを前提として「個人に何らかのポジティブな影響・変化を及ぼす強い情動体験である」という感動の定義を改めて行った。

【第2章 スポーツの価値】

まずスポーツの根源である「遊び」という概念から、これまでの日本におけるスポーツ文化の未発達を明らかにした。その後、スポーツの実施・観戦状況による考察から、近年のスポーツ

人口の増大傾向と関与度の高さを挙げ、スポーツが文化として確実に定着してきていることを示唆した。また、スポーツと身体・人間形成の関わりの中で、スポーツが後天的な環境として「情緒安定」「社会性」などの形成に大きな役割を担い、「爽快感」や、ストレス低下などの「ネガティブ事象の軽減」にも貢献していることがわかった。

【第3章 スポーツの感動】

1・2章の考察を照らし合わせ、そこに感動との関連見いだした。その結果、感動に関連した要素として、「する」スポーツでは、運動後の「爽快感」や目標実現による「達成感」、さらには、集団スポーツで生起されやすい「思いやり・愛情」などの「友人・家族」とのエピソードが挙げられ、「みる」スポーツでは、素晴らしいプレーに遭遇した時の「興奮」やスポーツの裏にある様々なドラマへの「共感」が挙げられた。これにより、どちらも感動喚起を促す要素が随所に存在していることを明らかにした。さらに、教育的側面では、感動喚起による生徒の行動意欲や性格形成の実現、ビジネス的側面では、スポーツを商品として捉えた時の、経験に感動を付与することによるスポーツ消費者の価値の創出の強化、など、様々な側面でスポーツの持つ感動要素に意義があることが示唆された。

【終章】

以上のことから、スポーツは様々な局面に感動喚起の要素を含んでおり、ここに、スポーツと感動の関連性を実証したと考える。つまり、随所に感動要素を含むスポーツは、体験・視聴の

2 つの側面から気軽に感動を経験することが可能であり、感動体験に最適なツールであるといえる。先述した感動の意義に基づき、「する」「みる」問わず、スポーツ関与による関与者の行動的側面・心理的側面ともに、個人差はあれどもポジティブな変化は実現できるものとし、このポジティブな事象が社会全体にもたらす影響を期待することができる考える。